

地方創生と伝統行事 ～土地の記憶を行動で共有する～

④「牛の角突き」(前編)

上席専門職 平沼 浩

目 次

- | | |
|-------------|----------|
| 1. はじめに | 3. 牛の角突き |
| 2. 開催地の環境概要 | 4. 小括 |

1. はじめに

4回目となる「地方創生と伝統行事」は、新潟県長岡市山古志の「牛の角突き」を紹介したい。目的は住民主体による地方創生のヒントを導くこと、主なキーワードは、「住民」、「復活」、「復興」、そして「感謝」である。「牛の角突き」とは、一言でいえば、この地に古くから伝わる闘牛行事である。

およそ14年前、2004（平成16）年10月23日に発生した新潟県中越地震は、山間部を震源とする内陸直下型地震で、震源は地下13kmと浅く、マグニチュード6.8、最大震度7を記録する大地震だった。とりわけ山間地域の山古志村に甚大な被害をもたらした。地震と地滑りは尊い命を奪い、山や棚田、道路を崩落させ、村は完全に孤立した。



平成21年にリニューアルされた山古志闘牛場。小高い山の中腹にあり、増設された観覧席はブナ林と調和している。

土砂で堰き止められた小河川が河道閉塞を起こし、二次被害の危険を増大させた。切迫した状況で自衛隊の救難ヘリが2千人以上の村人を運んだ全村避難の様子は、今も多くの人の記憶に刻まれている。

後に、全ての避難指示が解除され、長岡市内の仮設住宅から最後の1人が復興途上の故郷に帰るまでに約3年半が経過した。その間、山古志の人々は、避難所の体育館や仮設住宅に暮らし、先の見通せない不安を抱えながら、伝統の「牛の角突き」を仮設の闘牛場で催し続けた。そして、復興後は、全国から寄せられた支援への感謝を込めて、伝統の「牛の角突き」を開催している。

前編では、伝統行事の背景となる開催地の概要と「牛の角突き」を中心に紹介したい。



千秋楽の光景。例年5月から11月の間、祝休日に12回催される。

2. 開催地の環境概要

(1) 山古志

新潟県の地理は、京の都に近い順に、上越、中越、下越、佐渡の4地方で呼んでいる。被災の翌年に中越地方の中心都市長岡市と合併した山古志村は、市の南端部に位置している。西南方面を小千谷市に接し、東方面を魚沼市に接し、交通は道路で接続する。JR上越新幹線長岡駅から山古志闘牛場までの距離は、国道17号を南下し約18km、車で約30分である。

山古志の区域は、東西8km、南北9km。総面積は、東京都千代田区の約4倍にあたる約40km²だが、その大半は山と谷である。標高は、最高710m、最低120m。道路は、山々の胴体を横に沿うように蛇行して走っている。平地は少なく、比較的広い場所といえば、役場支所や統合されて1カ所にまとめられた小中学校等の公共施設を数えるくらいである。住居は標高500～200mの山ひだに、かつての集落の面影を残すように分散しているが、復興造成地に転居を余儀なくされた方々も少なくないため、昔とは少し様相は変わったようだ。

夏に道路脇から見下ろすと、緩斜面に階段状に拓かれた緑の棚田、鏡のように太陽光を反射する錦鯉の棚池^{たないけ}が、谷に向かって広がっていた。それだけで十分に美しいのだが、遠く南東方面には、山波の向こうに標高2,000m級の駒ヶ岳、中ノ岳、八海山の魚沼三山が屏風絵の如く連なり、その何倍も大きな青空

が遠くまで広がっていた。その眺めは、壮麗なパノラマ風景である。

ちなみに、1970（昭和45）年9月、当時の村長に招かれた民俗学者の宮本常一は、研究所の後輩たちに「美しい村だった」と感想を伝えている。そして、わずか2か月後には、村の活性化の基礎調査と称して、若い調査員を山古志村に送り込んでいる。その際に収集された資料は、後の『山古志村史民俗』（1983年）の基礎をなす民俗資料となった。

また、山古志は錦鯉の発祥地でもある。例年10月の品評会には、遥々ヨーロッパからも泳ぐ芸術品を求めてディーラーや愛好家が訪れる。元々、休耕田で食用に養殖していた真鯉が、突然変異を起こしたものらしい。約200年の間に、改良に改良が重ねられ、現在その品種は約100を超えるという。

山古志から小千谷市の一部を含む一帯地域は、2017（平成29）年3月、「雪の恵みを活かした稲作・養鯉システム」に支えられた景観として、初の日本農業遺産に認定された。

(2) 雪と隧道

気象の特徴は、雪国の新潟県内でも有数の豪雪である。3～4mの積雪が観測される積雪期間は、11月下旬から4月頃までの約5か月間と長い。山古志では、家に降り積もった雪の除雪作業を「雪掘り」という。復興後の新しい住居は、もっぱら1階を倉庫にした3階建タイプが目立つ。屋根の傾斜も鋭角である。



8月中旬の棚田と棚池の景色。



左と同じ場所で、3月中旬の景色。

雪質は、日本海の湿った空気により水分を多く含み重い。錦鯉を養殖する棚池では、積雪が池の水分を吸収して池底の錦鯉を窒息死させてしまう。そのため、冬になると錦鯉は越冬ハウスに移される。

こうした冬の雪深さを、夏でも感じられる象徴的な史跡がある。域内に3か所残る^{ずいどう}隧道である。現在は通行禁止だが、かつては、子どもたちを雪の季節にも安全に通学させ、日用品の買い出しや急病人を運ぶため、集落の住人が無報酬で掘ったトンネルである。

中でも東竹沢地区の小松倉集落から魚沼方面に抜ける中山隧道は、長さ877mと日本最長である。行政の支援が得られず、1933（昭和8）年から集落の人々が自ら作業に取り掛かり、太平洋戦争の約4年の中断を挟み、足かけ15年以上の歳月をかけて1949（昭和24）年に貫通させた。山古志東端の小松倉集落からは、どの街へ行くにしても峠越えが必要で、最も近い魚沼方面の旧小出町へ行くには、まず、4km以上ある中山峠を越える必要があった。中山隧道は、その道のりを労力と引き換えにショートカットした。1998（平成10）年に2車線の中山トンネル（913m）が完成するまで、半世紀にわたり生活道路として利用された。

中山隧道は、入口付近から50m程度が見学可能な状態で保存されている。冬の雪深さとはごく普通の人々の行動力の偉大さを思い知らされる史跡でもある。



右は夏の中山隧道。隧道内ではツルハシの削痕や工事経緯を示すパネル等を見ることができる。坑道幅は軽自動車1台分程度。

左は3月中旬の中山トンネル。クルマでの通過時間は、わずか1分。

隧道の掘削には、「横井戸掘り」という伝統技術が生かされた。先人は、棚田に水を供給するために、斜面に約50mの横井戸を掘って山腹内部から地下水を引いていたのである。

豪雪ばかりを強調すると、暗澹たる生活を想像してしまいがちだが、現在は道路も整備され、基幹道路の除雪も行われるため、積雪の苦労は昔ほどではないようだ。ちなみに昭和40年代に宮本常一から派遣された民俗写真家の須藤功は、『宮本常一とあるいた昭和の日本』の中で、冬の暮らしぶりを捉えた写真に次のコメントを添えている。

「深い雪に閉ざされる冬の間、山古志村の人々の主な仕事は屋根の雪掘りだが、雪解けとともに始まる米作りや錦鯉養殖のための準備も怠らない。その合間に、雪のない季節にはできない囲碁や将棋大会を開く。女の人たちは踊りの講習会を持ったりする。みんなの心をひとつにして、冬を楽しく過ごすこともおろそかにしていない。」

(3) 山古志の地名

山古志村は、1956（昭和31）年に種^{たね}芋^す原^{はら}村・太田村・竹沢村・東竹沢村の合併によって発足した。域内には14の集落がある。長岡市と合併した2005（平成17）年当時の地名表記は、長岡市「古志」だったが、現在は旧村名を活かして長岡市「山古志」となっている。

「古志」という地名は古く、少なくとも10世紀には公のものだった。平安時代中期の『延喜式^{えんぎしき}』巻22には、諸国の地名が、当時の行政区域にあたる道、国、郡^{こおり}の単位で記載されているが、古志は北陸道、越後国七郡（頸城、古志、三嶋、魚沼、蒲原、沼垂、石船）の1つとして記載されている。同様に平安中期の辞書『和名類聚^{わみょうるいじゆしゅう}』にも、越後国七郡の1つに古志郡がみえる。

江戸時代になると長岡藩領となり、この地

域は山六ヶ村と山二十村に分けられた。元禄以降は、幕府領に編入され二十村郷が地域全体の呼称となる。その領域は、旧山古志村に加え、現在の小千谷市の一部、魚沼市の一部、長岡市の一部に跨る村落群を指していた。

幕末の地域呼称は「山古志組」だった。明治時代の府県制・郡町村制の制定過程で、一時途絶えた古志郡は古志郡として復活し、役所は長岡に置かれた。その後、古志郡という行政区域は、長岡市との合併まで存続した。

ところで、長岡といえば、幕末に未来への教育投資を優先した「米・百俵」の精神が有名だが、その長岡市には、新潟の古代から現代までの生活を体感できる立派な県立歴史博物館がある。例えば、炎のような装飾で知られる縄文時代中期の火焰型土器が使われた様子や製作風景も、当時の人々の暮らしとともに立体空間の中で体感できる。

『山古志村史』の古代史編には、池谷地区の赤木遺跡から発掘された縄文時代中期の土器が写真とともに紹介されている。縄文中期といえば、少なくとも5千年以上も昔である。

(4) 牛と二十村郷

牛との歴史は、『山古志村史』および『山古志村史民俗』によると、この地域が二十村郷と呼ばれた江戸時代まで遡ることができる。それ以前となると未詳である。

牛の生活貢献の代表例は、大まかにいって、「厩肥」、「運搬」、「農耕」の3つである。加えて、春の神事「牛の角突き」が催された。

① 厩肥

厩肥とは、家畜の糞と藁等を混合し、腐熟させた有機質肥料である。牛の飼育目的の多くは、自給肥料の取得にあった。長い冬の間、牛舎で牛に踏ませた厩肥は、春には堆肥として田畑で利用された。二十村郷では、厩肥をそれだけ必要としていた。

小千谷地方、南魚沼地方の特産で、ユネスコ無形文化遺産に登録されている高級麻織物「越後上布」(小千谷縮・越後縮)の繊維原料は苧(苧麻)である。二十村郷は苧の産地でもあった。上質な原料を生産するには、大量の肥料を必要としたのである。山古志に残る種苧原という地名には、苧をよく産した所という意があるのだという。

② 運搬

運搬にも牛は貢献した。緩斜面に拓かれた田畑の細い坂道の登り降りには、馬よりも牛が適していた。村落間の道も、小千谷方面や長岡方面に向かう道も整ってはいなかった。このため、長距離物資輸送に牛が貢献した。収穫された雑穀類を町に出荷し、塩、油、塩魚等の食料品、あるいは日用品を仕入れる物資輸送に携わる人も多かったという。

③ 農耕

農耕にも牛は貢献した。山から谷に広がる棚田や棚池の美しい景観を造り上げる営みには、もちろん牛が一役買っていた。

かつて二十村郷で活躍した牛を、敢えてメカニカルに表現すれば、「人の意思に従う知能を持ち、有機質肥料生産機能付きで、坂道悪路走破性に優れた4足歩行式トラクター」といえるかもしれない。いずれにせよ、牛は山間地域の暮らしの強力な味方だった。

牛の産地と種類は、主に南部牛の雄牛だった。当地で繁殖は行わず、当時東日本最大の牛の産地であった南部地方(現岩手県久慈市山県町)から若い牛を直接買い付け、あるいは会津経由で買い付けた。二十村郷の馬喰は、多くの南部牛を越後に運んだという。

もちろん、全ての家が牛のオーナーだったわけではなく、所有者は各村落の比較的裕福な家に限られた。ただし、持たざる者は、世

話の肩代わりや労働を対価に厩肥を譲り受けることもでき、農繁期の時期にずれがある地域から牛を借りることもできたようだ。

④ 牛の角突き

牛の角突きは、春の奉納神事として年に1度行われた。長い冬の後には春を迎え、繁栄を祈る祭礼だった。同時に、人々にとっては、農作業繁忙期前のひとときの娯楽であり、牛たちにとっては、狭い牛舎から久々に解放されるときでもあった。

また、牛の角突きは、同じ村落内では催されず、各村落から1カ所に遠征して、対戦組は相談のうえで決められた。村落代表の色合いを帯びれば、自ずと牛は、「俺たちの牛」として声援を浴びることになる。

牛は、使役動物以上の存在だっただろう。

3. 牛の角突き

(1) 日本の闘牛

闘牛といえばスペインが有名だが、スペインの場合は「闘牛士と牛の闘い」であり、牛は複数の闘牛士から剣や槍を突き刺され、最後は息の根を止められる。

日本の闘牛は「牛同士の闘い」であり、雄本来の闘争本能がぶつかり合う。放っておけば自然に起こる雌や縄張りを争う雄の^{さが}性に、人為的舞台を設けたのが日本の闘牛である。

現在国内の闘牛開催地は、岩手（久慈市）、新潟（長岡市、小千谷市）、島根（隠岐の島町）、愛媛（宇和島市）、鹿児島（徳之島町、天城町、伊仙町）、沖縄（うるま市）の6県9市町である。

闘牛の呼び方は、新潟では「牛の角突き」、島根県隠岐島では「牛突き」、鹿児島県徳之島では「牛オーシ」といい、それ以外は、そのまま闘牛と呼んでいるようだ。多くの地域が勝敗を決する中で、新潟では双方の激しい闘志が発揮されたところで引き分けにする。

日本の闘牛士は、一般に「^{せこ}勢子」と呼ばれ

るが、地域によって役割は多少違っている。牛1頭に原則1人の勢子が、ボクシングのセコンド役のように付添い、次々と勢子が交代する宇和島、徳之島、沖縄。大勢の勢子が双方の牛を取り囲む新潟。島根県隠岐島では、闘牛士を「^{つな}綱とり」といい、牛1頭に1人の「綱とり」が付き、^{ひきつな}引綱を取って牛の闘いを介助する。それは、島に配流された後鳥羽上皇に安全にご覧いただいた工夫の名残だという。

どの地域でも闘牛場に牛が入場するまでは、牛は最大急所である鼻に縄や引綱を着けられ人間に制御されている。それを終始外さないのが隠岐島。闘いに勢いがついた頃を見計らって引綱を切るのが徳之島、沖縄。引綱を外して闘わせるのが新潟、宇和島である。

体重1t超の雄牛同士の激闘は、人間のパワーを遥かに超える。体重1t超を人間に換算すれば男子高校生20人分、一流ラグビー選手のフォワード8人分に匹敵する。陸生哺乳類最大の象は動物園で暮らし、SF映画の巨大怪獣は、そもそもフィクションである。象や怪獣映画が一般的でなかった時代を想像すると、闘牛こそ、リアルな地上最大のスペクタクル対戦だったに違いない。

(2) 山古志の牛の角突き

特徴をあげるならば、次の3点をあげたい。

① 豪雪地域の闘牛

国内6県9市町で行われている闘牛の中で、山古志ほどの豪雪地域は他にないだろう。長い積雪期間を経て春を迎える神事だった二十村郷の伝統文化に、気象環境が今でも無言の説得力を与えている。

② 勝敗を決しない闘牛

「牛の角突き」は、激闘が最高潮に達した瞬間に、勢子達が引き分けにする。名勝負を名勝負のまま終わらせる究極のノーサイド・

ゲームである。必然的に、「牛対牛の闘い」のクライマックスには、「牛対勢子の闘い」が計算される。

引き分けにする最大の理由は、牛に痛烈な劣等感や挫折感を味あわせない配慮なのだという。引き分けは、大切な牛の闘争心にダメージを与えず、自信を育み、さらに強い牛に育てる伝統なのである。ちなみに、勝敗を決する地域では、負牛に相当長期間の休養を与え、観光闘牛に限って引き分けにするなどの工夫をしているようだ。

元々、春の農作業前に行う奉納神事だったなら、繁栄を祈る神事に敗者は不要かもしれない。また、村落代表のような形で牛と人が集うのであれば、遺恨をつくらず誰の面子も潰さない知恵を想像したくなる。そう考えると、牛同士の引き分けは、人間集団を含めた共存共栄の象徴になりうる。

③ 南総里見八犬伝に登場した闘牛

二十村郷の「牛の角突き」は、江戸時代後期の大ベストセラー『南総里見八犬伝』第73回（話）に登場していた。曲亭馬琴（滝沢興邦）が「牛の角突き」を知り、八犬伝に取り入れる時期は、丁度、文政年間（1818年～1831年）と重なる。少し抜粋する。

「当国古志郡二十村には、毎年三四月の此、或は丑の日、或は寅の日の、吉辰を卜定て、角突と倡たる、闘牛の神事あり。（中略）これを地方の俚語に、牛の角突と呼做したり。」

当国とは、越後のことである。描かれた特徴点を幾つか箇条書きにしてみる。

- ・牛は南部牛が多い。稀に佐渡牛もいる。
- ・牛は持ち主の屋号で呼ばれている。
- ・牛の入場は相撲の土俵入りと異ならない。
- ・取組案内は、「東は○村の○衛門、西は△村

の△兵衛」と見物人にも紹介される。

- ・勢子は「力士」と呼ばれ、各村落からの屈強な若者が華美な装いで参加する。
- ・牛の鼻から引綱を外して闘わせる。
- ・勝敗および東西の力士（勢子）に争いがあれば、「牛裁判」と呼ばれる審判員が、東西の力士（勢子）と交渉し、牛の持ち主と最員のファンをなだめる。
- ・茶屋や酒舗の出店が並び、蕎麦・団子・煮染物、餅・駄菓子で商われる。
- ・隣郷隣郡から老弱男女が見物に集まる。
- ・開催場所は、三方が小山になり中央が窪んで平らな所が選ばれ、見物衆はやや高い場所から見物する。

たいそうな賑わい振りが偲ばれる。勝敗のジャッジは一応あったとみえるが、勝敗基準はノックダウンではなく勢いの差を見ていたような書きぶりである。特に、多くの筆が割かれているのは、負牛を傷つけないよう、力士（勢子）達が双方の牛に群がり掛かる場面や、形勢が拮抗した場面で力士（勢子）達が双方の牛を引き離して引き分けにする場面である。やはり、引き分けが最大の見所であり特徴だったといえるだろう。引き分け後の総括場面を抜粋する。

「その牛共はなお飽かで、迭に突んと走り蒐るを、力士等手段を旋して、敢又闘はせず、竟に牛麁を引融して、牽て旧所に到るに、その両牛欣々然と、自負するものに似たる気色あり。迭に負ぬ故をもて、なおその勇を示すなるべし。されば、這数十番なる勝負の間に、観者宛酔るが如く、惘然として食を忘れ、愕然として胆を落し、日の傾くを覺ずして、奇なり妙なり、と称する声は、彼麁に鳴る海の如く、又遠山の雷を聞くに似たり。實に是、北国中の無比名物、宇内の一大奇観なり。」

二十村郷の「牛の角突き」を日本一の大スペクタクルと形容した馬琴は、伝奇物語の途中で、「この牛の角突きのは、ここまでは皆真説」と異例の断り書きを付した。そして、第73回の最後に、内容は越後魚沼在住の鈴木牧之が目撃して書いたスケッチとレポートによる旨を付している。

鈴木牧之は、魚沼（現在の南魚沼市塩沢町）で質金融と特産高級織物「越後縮」の仲買商を営む傍ら、馬琴や北斎らとも交流をもった才人である。鈴木牧之は、後に文と絵の写実能力を活かして『北越雪譜』を江戸で出版した。『北越雪譜』は、雪国越後の文物風習を丁寧に記した民俗誌兼博物誌であり、冒頭の挿絵は、除雪作業風景、続いて綺麗な雪の結晶図35種を解説している。

当時、体に不調をきたしていた曲亭馬琴と越後の暮らしや文物を広く紹介したいと願った鈴木牧之、この2人の出会いと思いが、八犬伝の第73回を生んだともいえるだろう。

ところで、物語は、悌の珠を持つ五人目の犬士、犬田小文吾の活躍へとつながる。小文吾は、巨漢にして相撲技を得意とした。それまで、見物人に過ぎなかった小文吾に、次の武勇伝が用意されている。

最終取組みで、竜種（竜の種を宿して生まれた牛）の異名をとる大牛の須本太が、角突きの中で暴走する。飛び掛かる力士（勢子）



闘牛場に至る坂道で最初に目にする石板画は、八犬伝の挿絵「自若として小文吾 暴牛を駐む」。闘牛場の坂道が、山古志の歴史・伝統文化を伝えるギャラリーになっている。

達は、抑え込めずに跳ね飛ばされてしまう。暴れまわる大牛に、出店も滅茶苦茶に壊され、見物衆はパニック状態で逃げ惑う。大混乱の最中、突然、暴れ牛は、小文吾を目掛けて突進する。これを小文吾は閃光のようにひらりと体かわし、角と首を捕まえて暴れ牛を抑え込む。この場面の挿絵タイトルは、「自若として小文吾 暴牛を駐む」である。

1978（昭和53）年5月、二十村郷の「牛の角突き」は、国の重要無形民俗文化財の指定を受けた。現在も、闘牛のジャンルで国の重文指定例は、長岡市の山古志地区と小千谷市の東山地区だけである。選考において八犬伝は決め手の史料となったそうだ。

(3) 中断と復活、パラダイムの転換

江戸時代に奉納神事と娯楽を兼ねて盛んに行われた「牛の角突き」は、明治時代以降、どのような経緯を辿ったのだろうか。

明治の頃

維新政府は、西洋列強の脅威を未曾有の国難とし、大政奉還によって生まれた。いわゆる「王政復古の大号令」の太政官布告（慶応3年12月9日、太陽暦1868年1月3日）の結文は、次のように書かれている。

「叡慮二付 各 勉勵 旧来 驕惰之汚習ヲ洗ヒ
 尽忠報国之誠ヲ以テ 可致 奉 公 候 事」

ここに、近代国家構築に向けた維新政府の強い意思が表明されている。ただ、「汚習ヲ洗ヒ」と命じられる側は堪らない。たとえば、明治政府は、1872（明治5）年に太陽暦を採用した。これにより農耕と結びついた旧暦は否定され旧暦行事も否定された。旧正月に門松などを燃やす「サイの神」、「どんと焼き」の行事は火災予防や非文明的等を理由に禁止され、「盆踊り」は、男女の風俗の統制を理由

に禁止された。

しかし、民衆は旧暦行事をやめなかった。明治初期には、日本各地で盆踊り禁止の通達が繰り返し出された。例えば、小説『杵杵・セクスアリス』には、森鷗外が少年期に経験した津和野（現在の島根県津和野町）の盆踊が登場する。優等生の少年には、すでに盆踊りは後ろめたいものと描かれている。

そうした時代に、長岡警察署は、幾度も山古志地域の集落代表から盆踊りを行わない旨の誓約書を提出させていた。

1875（明治8）年には、錦鯉を贅沢品として禁止令が県から出された。幸い、牛の角突きに禁止令はなかったが、1876（明治9）年4月、勢子の服装や牛の装飾に注文がついた。翌年4月には、華美な服装や目立つ牛の飾りつけを行わないよう、「牛角突きの節、常服じようふくにて、縮チリメン相用申間敷事、目立品相用申間敷事」と釘を刺されている。

それでも、牛の角突きの勢いは衰えず、同年9月には、牛30頭を引き連れた30日間の東京興行が行われるほどだった。

戦前の牛の装飾は、華やいでいたという。

戦中戦後からの復活

太平洋戦争の期間は、他の地域の伝統行事と同様、牛の角突きも中断を余儀なくされた。戦後もしばらく禁止され、1951（昭和26）年になって、ようやく復活する。

高度経済成長期の盛り上がりと衰退

牛の角突きの盛り上がりは、1960（昭和35）年頃にピークを迎えるが、その頃から衰退傾向も始まった。350頭いた山古志村の牛は、10年後には3分の1程度まで減少した。背景には、化学肥料による肥料の代替、素牛の値上がり、錦鯉に切り替える農家の増加、農家の兼業化、出稼ぎの増加、離村者の増加等があげられる。経済環境が一変したのである。

昭和期2度目の復活

1971（昭和46）年になると、山古志村は畜産振興策の一環で村の共有地を牧草地に改良し、村の青年7名が肉用牛肥育組合を組織した。そこから、素牛の共同購入、肥育管理事業を始めとする多頭肥育体制が構築され、村当局と民間と農業改良普及所の一体的な畜産振興が始まった。

1974（昭和49）年には、一時途絶えた「牛の角突き」が有志の手で催され。翌年1975（昭和50）年には、大勢の観客が見守る中、伝統の「牛の角突き」は正式に復活した。

実は、この復活過程でパラダイムの転換が起きている。厩肥も不要、使役動物としての役割も失った牛は、「肉牛」（牝牛、去勢牛）と「角突き牛」（無去勢牛）に分化する。ちなみに、角突き牛は、筋肉質のため肉が固く経済価値はゼロに等しい。つまり、角突き牛には、生業性も経済的メリットもなく、逆に持ち出し負担を必要とした。

それでも伝統の「牛の角突き」が復活したのは、支える理由が、生業性や経済性を超えた故郷の歴史文化に転換したからだろう。

ちなみに、従来、個別飼育された角突き牛は、復興後は共同施設で共同飼育されている。

(4) 現在の牛の角突き

山古志の角突き牛の頭数は、流動的ながら約60頭。8割は岩手産の南部牛、それ以外は北海道産、島根産、鹿児島産、沖縄産等である。当地で繁殖は行わず他産を導入して育てる伝統は変わらない。「牛持ち」と呼ばれるオーナーは地元をはじめ、岩手県や長岡市、埼玉県、東京都、兵庫県にも跨る。牛を通じた地域間交流も持たれている。

開始時間は午後1時。雨天決行。牛は降雨を喜ぶのだそう。場内には、お清めの塩とお神酒が撒かれる。概ね2時間の間に12～15番の取組みが生まれ、24～30頭の牛が登場する。

山古志闘牛会の挨拶や来賓挨拶では、来場者への感謝と併せて中越地震に際して全国から寄せられた温かい支援に対する厚い感謝の言葉が添えられる。そして、まるで自分たちの使命であるかのように、全国各地の被災者に寄り添い復興を願う言葉が添えられる。

出場する牛は、成熟年齢に合わせて3歳以上と決まっている。牛の3歳は人間に換算するとおよそ5倍の15歳、体重は500～700kg程度である。序盤に登場する若い牛には、無理をさせず、^{ひきづな}引綱を着けたまま闘志と意地を育む。

取組みが進むにつれ体格は増し、体重1t前後、体重1t超の巨大な牛が続々と登場する。引綱を外された両雄を取り囲む勢子達は、およそ15人。両手を真横に拡げて、「ヨシターー！コラキタ」の掛け声で牛の闘志を煽る。

牛は「モー、モー」と啼くと思ひ込むのは大間違いで、このクラスの無去勢牛は「ヴォー、ヴォー」と啼く。勢子用語で「ドー^{こえ}声」と呼ばれる咆哮^{ほうこう}は、威嚇の雄叫びである。譬えるなら、ゴジラの咆哮から金属音を差し引いた残音の鈍い響きに似ている。後半は12～13歳の老獺な勝負強い牛も登場する。最終取組は最強の牛同士の対戦となる。



引き分けにする勢子は、勇気とスキルと連携が試される。まず、ゲームの司令塔にあたる2人の勢子がタイミングをはかり合い、双方の牛の後方から片脚にタックルするように「^{あしかけづな}脚掛綱」を掛ける。その綱を勢子達が綱引きの要領で後方に力の限り引っ張る。牛の推進力を制止させている間に、他の勢子が牛の角を抑え、さらに別の勢子が牛の急所の鼻^{はな}を捉えて、麻縄で出来た「鼻縄」を通す。このフィニッシュで牛は制御される。鼻縄には引綱が連結されて入場時と同じ形に戻る。縄も綱も牛を傷つけない伝統用具である。

勢子の連携プレーは、瞬く間に展開されるため、目が離せない。

「牛対牛の闘い」は、ラグビーのスクラム戦に似ている。8人対8人のフォワード同士の駆け引きと意地のぶつかり合いを彷彿とさせる。「牛対勢子の闘い」は、ラグビーのバックス攻撃に似ている。自分よりも大きな相手を勇敢なタックルで仕留め、ボールをもぎ取り味方へパス、そして最後は、快速ウイングによる華麗なトライでフィニッシュ。

山古志には、MC勢子とも呼ばれる名物勢子がいる。松田淳さんだ。司会、実況、解説を兼ね、牛の後脚に脚掛綱を掛ける勢子の司令塔であり、牛持ちでもある。牛の性格から癖までを熟知したプロフィール解説、繰り出される攻め技や対抗方法、牛の姿勢や挙動から心理状態も実況解説してくれる。予備知識



左肩に脚掛綱をかけた勢子の司令塔。右手の綱を牛の後脚に回して左手で引き、片脚を捉える。

ゼロでも、「牛の角突き」の醍醐味を堪能させてくれる有難い存在である。

実況解説は20年程前まで場外で分業されていた。解説者の引退を機に20代前半の松田さんが現在のスタイルに融合させた。幼少期から「角突き博士」と呼ばれ、中学1年生で勢子デビューした逸話は、地元では誰もが知る常識になっている。40代半ばにして勢子歴30数年の名調子を少し紹介したい。

「さあ、双方が思いを整えて、相手の出方をうかがっています」

「さあ、まず仕掛けたのは黒牛の〇〇〇、これを落ち着いて受け止める赤牛の△△△」

「闘いが終わっても、闘いを終わらせたくない牛の意地。それを引き分けにする勢子の意地」

一戦毎に牛持ちは、引綱をとって場内を一周する。その際の口上は決まっている。

「さあ、双方、綱が伸びます。皆様今一度大きな拍手をお願いします」

観覧席からは、双方の牛と牛持ち、勢子達に惜しめない拍手が送られる。

山古志闘牛会の松井富栄会長に運営についてうかがった。松井会長は、松田さんの10歳後輩にあたり、細身の体で暴れ牛の鼻を制圧



写真の牛は「龍馬」。体を触らせてくれ、子どもを背中に乗せてくれる。奄美大島で生まれ、仔牛の頃から子どもと一緒に育ったため、人間を全く恐れない。頭に装着しているのは、化粧回しにあたる「面綱（おもづな）」。

世界のサッカー選手に影響を与えたキャプテン翼の名ゼリフ「ボールはともだち こわくないよ」は、牛にもあてはまる。

する引き分けのフィニッシャーでもある。

運営は受付から駐車場の誘導係に至るまでボランティアに支えられ、勢子も全員各々が本業を持っているようだ。入場料はやむなく有料としているが、入場料収入は餌代等の最低限の維持管理費に充てられているものの、牛持ちの負担分には到底及ばないという。つまり、関係者が各々の負担を心意気で持ち寄り、来場者にも支えられ、伝統行事は維持されている構図である。

4. 小括

立派な闘牛場は、震災復興の象徴でもある。ただし、お金で再生可能な入れ物と違い、そこで繰り広げられる「牛の角突き」は、世代を超えて受け継がれてきた無形の文化であり、金銭換算不能な宝である。

巨大な牛の激突と勢子の心意気は、八犬伝の「^{みくにのうち}宇内」の一大奇観なり」を現代に引き継ぎ、進化もさせている。

後編では、山古志の復興と「牛の角突き」について紹介したい。

【参考文献】

- ・『山古志村史』山古志村・1981年
- ・『山古志村史民俗』山古志村・1983年
- ・須藤功「山古志村」、田村善次郎・宮本千春『宮本常一とあるいた昭和の日本・11関東甲信越1』社団法人農山漁村文化協会・2010年
- ・日本農業遺産・農林水産省ホームページ
- ・宮西惟助『校訂延喜式下巻』大岡山書店・1931年
- ・『和名類聚称』国立国会図書館デジタルコレクション
- ・広井忠男『日本の闘牛』高志書院・1995年
- ・曲亭馬琴作・小池藤五郎校訂『南総里見八犬伝 四』岩波文庫・1990年
- ・鈴木牧之『越後古志郡二十村闘牛之図』長岡市立中央図書館・ながおかネット・ミュージアム
- ・鈴木牧之編撰・岡田武松校訂『北越雪譜』岩波文庫・1978年
- ・『慶応3年太政官布告第13』国立国会図書館デジタルコレクション
- ・森嶋外『エタ・セクスアリス』新潮文庫・1993年
- ・高橋陽一『キャプテン翼・5巻』集英社・1983年